

LIVING SCIENCE NOW

CONTENTS

Special Talk P.1、P.2
グローバルマーケットにおけるビジネスチャンス
今野 由梨

原宿サロン/12月例会 P.3
牧野 健太郎氏
メンバーズ・プレゼンテーション P.4
市山 幹雄氏
NEW MEMBER P.4
大久保 秀夫氏 見城 尚志氏
Dial Service Now P.4

SPECIAL TALK

グローバルマーケットにおけるビジネスチャンス

今野 由梨

(ダイヤル・サービス株式会社 社長)
(日本ニュービジネス協議会連合会(JNB) 副会長)

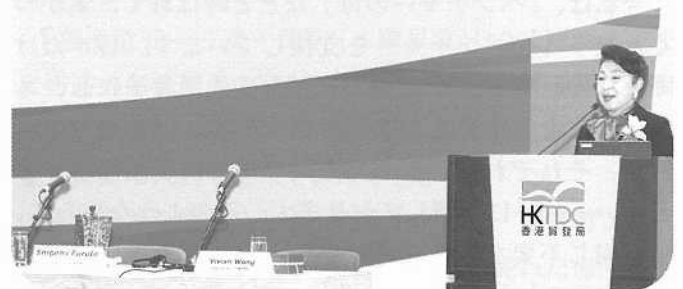
新春の巻頭ページでは、昨年12月10日、香港貿易発展局主催による「世界中小企業エキスポ2008 (World SME Expo in Hong Kong)」の会場で行われた、今野由梨の講演内容をお届けします。講演当日、「グローバルマーケットにおけるビジネスチャンス」をテーマとする講演者が、大企業の代表ではなく、しかも女性であることに大変な驚きと賞賛の声が寄せられました。

世界中の大きな関心と期待を集めた香港返還から、11年が経ちました。この間、金融・レジャー・不動産・消費・流通等、様々な面で香港の発展ぶりはめざましく、それはあたかも美しい花が開く様子をスローモーションで見るような驚きと感動を人々に与えてくれました。その香港でこうして皆様と集うことができ、心から嬉しく光榮に思います。

私が本日ここに招かれた理由は、今からちょうど40年前、日本の高度成長期が終わる頃に、日本で初めて、電話というビジネスのツールを、生活者のためのマン・ツー・マンの双方向メディアとして使い、様々なサービスとニュービジネスを世に送り出した、日本の女性ベンチャー第1号だからです。

55年前、女の子が一人、日本の小さな地方都市から東京の大学に進学するのは大事業でした。そんな大変な思いをして大学を出たのに、結局どこにも就職できませんでした。当時、女子の定年は25歳でしたから、大学卒の22歳の女子は、経済発展を追い求める日本企

World SME Expo Seminar 中小企国際推廣博覽研討會



業にとって、まともな労働力としてカウントされていなかったのです。悩み抜いた挙句、10年間は他人の4倍働いて準備し、10年後に自分が活躍できる場を自分で創ろうと決意しました。

それから10年間は、早朝の部、午前の部、午後の部、深夜の部と4人分の仕事を持ち、その後、1964年にニューヨークで開かれた「NYワールズフェア」でコンパニオンとして働きました。そして、それが電話を使ったICS、つまりインフォメーション&コミュニケーションサービスという新しい仕事を世に送り出す大きなヒントになったのです。ですから私は、本日このWorld SME Expoのような大会が開かれることには、非常に大きな意味があると思っています。きっと、このExpoの中からたくさんのヒントを得て、近未来のアントレプレナーが誕生し、次への躍進のためのすばらしい出会いが生まれると信じています。

準備期間を含めて50年、半世紀にもわたるベンチャー、アントレプレナーとしての人生を通して見ると、



日本という国の税制その他の法規制は、大企業を育てるためには整っていましたが、リスクを抱えてチャレンジするアントレプレナーには極めて

厳しいものでした。一例を挙げると、私の会社は、創業した瞬間から法律違反に問われました。なぜなら、「公衆電気通信法」という法律によれば、電話を使ったビジネスを日本電信電話公社以外に行ってはならないことになっていたので。この大きなハードルを乗り越えられたのは、私のサービスを利用する人々の大きなパワーのおかげでした。核家族化による人々の苦悩を手助けしようと生み出した電話育児相談は、スタート第1日目に、利用者のあまりの多さに電話回線がパンクしてしまったほどです。このような人々のニーズの反面、国の法規制や税制は完全に立ち遅れ、ベンチャーである私は、ただでさえ苦しい創業期に、意味のない手かせ足かせをはめられて、さらに身動きのとれない状態になりました。社会のそれほど大きな反響にもかかわらず、何度経営不振に陥ったか知れません。

今私は、「ベンチャーの母」などと呼ばれて、気がつくとも数多くのベンチャーを支援しています。日本だけではなく、ブラジル育ちの若者を正式に養子にし、ネパールにも韓国にも中国にも息子や娘たちがたくさんでき、それぞれが、世のため人のために貢献しようと元気いっぱい活躍しております。そのような彼らに、私と同じ不要な苦難や意味のない遠回りをさせないようにすることが、私の使命の一つだと思っています。



アメリカのサブプライムローンに始まった世界的な金融不況の津波に襲われ、日本も今100年に一度といわれる厳しい時代を迎えています。今年に入ってからだけでも、日本の上場企業が30社も倒産しています。ましてや、中小企業、特にベンチャーに対する風当たりは半端ではなく、倒産する企業は数えきれません。私の周辺だけでも、倒産予備軍が数多くいます。痛恨の極みですが、何人かの自殺者まで出ています。

今、私が彼らに呼びかけている言葉があります。「生き恥をさらせ」という言葉です。昔、私たちの親は、「生き恥をさらすな」と教えました。生きて恥をさらすより、死ぬ、と教え込まれました。でも、私は今どうしても彼らに言いたいのです。生きて生きて生き抜いて、たとえ、その過程で倒産や様々な辛い経験をし、

社会から叩かれようと、笑われようと、親しい人々から見捨てられようと、それでもそれを受け入れ、生きてこそ人生だ、と。生きているからこそ、その貴重な失敗の経験を生かして、人々を幸せにする技術やサービスを社会に送り出すことができる。それが、我々アントレプレナー、ベンチャーの使命ではないか、と。

さて、そういう状況下で、日本の中小企業やベンチャーは、①健康医療、②食糧、③エネルギー、④省エネ・エコカー・燃費向上など様々な分野で研究開発にチャレンジしています。

その一つとして、今回の展示会コーナーでは、ソーラーシステムや省エネの技術の提案をしております。また、近年日本が力を入れているテーマに、食の安心・安全があります。子どもやお年寄りが安心して食べられ、しかも栄養も味も高品質の食、そして水や空気を作るのは日本の得意技だと思っています。今回は残念ながら、そうした技術や製品のすべてを出展できませんでしたが、これを機に香港貿易發展局や私たちJNBを通じて連絡を取り合い、助け合っていきませんか。

健康・環境・食糧、エネルギー、防災、どれ一つをとっても自国で完結する問題はありません。すべてが密接にリンクし合



って、いつかまた自分に戻ってくる大きな運命共同体の宇宙の中に生かされているのです。11年前の神戸の大震災で得た経験から生まれた災害救助先端技術が、この間の中国四川大地震で人々の救出に役立っているのを知って、我々日本人はどんなに嬉しく思ったか知れません。

省エネ技術・クリーンエネルギー・バイオエネルギー等の環境技術、二酸化炭素吸収源である植林や森林保全、砂漠の緑化、食糧、医療、特に今、急がなくてはならないのが大流行の兆しがある新型インフルエンザの予防や対策でしょう。それらの知恵や技術革新の多くは、中小ベンチャー企業によって開発されています。政治にも外交にもできなかったことを、人と人、暮らしと暮らしの幸せを願う知恵と、心と情報の交流で創ることができるのです。

私たちのベンチャースピリットによって、人々を幸せにするSMEネットワークをグローバルに構築すれば、世界を変えるパワーになれる。そして、そこにこそ、21世紀の豊かなビジネスチャンスがあると信じます。あらゆる技術、あらゆるサービス、そしてビジネスの目的と使命は、国境を超えて、地球全体の安全と幸せづくりのためにあるのです。